

長時間燃焼薪ストーブ「ゴロン太」

石村工業

ユーザー通信

岩手発

加温して1シーズンに6、7回発生させる。品種は低温に強い「A-526」(秋山種菌研究所)、「201号」(セッコ)など。

「ゴロン太」の導入は2年前。それまで使っていた、間伐材などを燃料とする大型の温湯暖房機が壊れたため。佐々木さんは釜内内に行き渡らせる。早く燃え尽きるのを防ぐため、

岩手県釜石市の佐々木光一さん(63)は10月末から4月にかけて、50坪(165平方尺)のハウスで原木シイタケを栽培・収穫する。石地方森林組合の理事を務める。

丸太のまま投入

8時間以上燃焼

ハウス内が乾燥

石村工業(岩手県釜石市)が販売する薪(まき)ストーブ「ゴロン太」は、縦長の投入筒から1.2メートルまでの丸太を入れ、下から徐々に、長時間燃焼させる。丸太を割る必要がない。間伐材や廃材木などを利用すれば、燃料コストを大きく減らせ、夜間に燃料を追加する手間が省けるのも利点だ。化石燃料を使わず地球に優しい。導入する原木シイタケ農家に使い勝手を聞いた。

佐々木光一さん(原木シイタケ栽培)



「ゴロン太」に丸太を入れる佐々木さん(岩手県釜石市で)

生木を1、2本混ぜる工夫もする。「丸太のまま投入できるため扱いやすい。一晩中燃え、夜に起きて薪を補給する必要がない。重油を使わず環境にも優しい」と喜ぶ。

「大型機は100万円したが、ゴロン太は約30万円と安い。薪が手に入ればメリットが大きい」と評価する。

「以前の大型機に比べると夜温はしばしば目標温度を下回る。厳寒期の生育は遅くなるが、低温に強い品種で対応している」という。

気になる点もある。ハウス内の空気が乾き、シイタケ表面が乾燥する。「表面の乾燥は奇形の原因。棚の下の方は問題ないが、上の方で目立つ」と心配する。現在、ほど木に水を掛けて対処しているが「ストーブの熱で湯を沸かし、湯気で

専用水槽あり

現在、オアションとして、ストーブの後部に載せて湯を沸かし、湯気を立たせるステンレス製水槽を試作中です。トマト栽培などでは空気の乾燥は喜ばれますが、乾燥させたくない場合に使用してください。既に実用試験は

(同社調べ) 燃える。投入筒が斜めのため、丸太同士が密着して効率良く燃える。高さ142センチ、重さ150キロ。4000~4万キロ(50~100坪)。価格は29万4000円。問い合わせは同社、0193(22)3641。



▶「ゴロン太」直径5~20センチ、長さ1.2メートルまでの丸太を縦長の投入筒に入れ燃やす。直径20センチなら3本、15センチなら5本入る。筒の上部をふたで閉じ、空気が下部だけから入るため、丸太は下からじわじわと8時間以上

済み、注文があれば4万円程度で販売します。

現在、岩手県と共同で、湯を沸かして施設内のパイプを循環させる製品も開発しています。乾燥せず、ハウス内を満遍なく加温できます。(石村工業・石村真一社長の話)